

- 明治7年頃 松本秀発(松本フミの父)は、幕臣で幕府主戦派の勘定奉行小栗上野介の配下に属し九段一帯に広大な土地・屋敷を所有していたが、新政府の措置で禄を失った同僚の転業資金借り入れの保証人となったために、土地・家屋は人手に渡ってしまった。  
松本秀発は、神田錦町の区役所の傍で、庶民が区役所向けに提出する書類の代書業を営む
- 明治8年 松本秀発は、志げ、と結婚  
志げは、錦町に手ごろな旅館を買って、自由民権運動の志士たちの集会所をつくり、「松本亭」と名づけた。
- 明治11年 板垣退助らの愛国社再興運動
- 明治15年12月11日 フミが誕生した
- 明治17年3月 神田駿河台に、ニコライ堂が起工(竣工は明治24年2月)
- 明治17年 群馬事件、加波山事件、秩父暴動、信州飯田事件  
この頃神田錦町の「松本亭」は、全国各地の自由民権運動家たちの集会所となった
- 明治30年頃 「松本亭」は、田中正造らの足尾銅山鉱毒事件で政府追及のための志士たちのアジトになる  
フミは16歳となり、府立第一女学校の女学生
- 明治33年頃 フミは学校をやめて「松本亭」で母を助ける
- 明治34年 田中正造、天皇直訴事件
- 明治36年8月26日 「松本亭」の女将 志げ 死去  
フミ23歳, 長男の誠, 次男の清治  
「松本亭」の女将としてきりもりする
- 明治43年 松本秀発死去
- 大正元年頃 学生だった大野伴睦は騒擾罪で起訴され退学となり、「松本亭」の食客となる
- 大正2年3月 神田三崎町の救世軍の湯殿の不始末から出火し、神田神保町、錦町3丁目、鎌倉河岸まで延焼したが、幸い「松本亭」は延焼を免れた
- 大正6年6月 全国弁護士会会長選挙で、大正弁護士会と東京弁護士会の争いとなる  
投票所は松本亭のすぐ前の中央大学  
事務所として、「松本亭」をどちらがとるかの争い(「雀と烏の巢の奪い合い」と言われた)  
この頃の「松本亭」の規模  
2階に30畳の大広間と15畳の中部屋が2つ(襖をはずすと60畳の大広間になる)  
1階には、家族の住む茶の間、寝室、帳場の他に8畳、6畳の小部屋がいくつもあった。
- 大正10年 「松本亭」の改築  
裏の長屋を買い取って敷地が200坪  
3階建ての和洋折衷の高層な建築物(計画)  
時に、フミ40歳

棟上のときに、犬養木堂(毅)、頭山立雪が来て祝う

大正 11 年 1 月 三層楼の「松本亭」が竣工

大正 12 年 9 月 1 日 関東大震災によりせつかくの新築なった「松本亭」も灰燼に帰した

フミは牛込の親戚に避難

犬養毅を説いて、福澤桃介から建築資材を提供させ、錦町にバラック建ての長屋を建てて付近の住民を収容

(注)福澤桃介とは、旧姓岩崎桃介、武蔵国横見郡荒子村(現在の埼玉県吉見町)出身。明治 19 年慶応大学在学中に福澤諭吉の妻・錦の目に留まり、養子となる。明治 40 年日清紡績を設立。明治 44 年岐阜県加茂郡に八百津発電所を築く。同年日本瓦斯会社を設立。大正 13 年恵那郡に太井発電所(日本初の本格的ダム式発電所)を建築など。「日本の電力王」と呼ばれる。

大正 12 年 12 月 バラック建ての「松本亭」ができた

大正 13 年 「松本亭」の敷地の一角に柔道場の道場を建て、青年たちの武道を奨励し、心身の鍛錬に努めさせた

大正 15 年 「松本亭」では、大震災後のバラックから次第に増築して、改築につぐ改築が行われ、二階にも大広間が出来上がり、広間に舞台が設けられて、400人までの会合ができるようになった

参考文献3によれば、松本亭について以下のように記述している。

「正しくは錦町1丁目14番地に松本亭と称する2階建ての木造で、2階には30畳の大広間や15畳の中広間があり、数百人を収容できる今でいう貸ホールがあった(関東大震災前は木造3階であったと言われて当時有名なものであった)。下には8畳、6畳の茶の間、帳場があった。これは大正時代から昭和初期にかけて都内でも主要な貸席(貸ホール等ビルが少ない時代の故に)の一つであったが、昭和20年にB29の大空襲で焼失した。戦後バラックに居住した松本フミは区の自治や人権のための社会活動を行っていたが、老齢のため九段上へ移り、やがて電機学園は大学院設立のため昭和32年買収した(204㎡の広さで校舎落成は昭和33年4月)。」

なお、この買収時期については、参考文献5のページ140(校舎のうつりかわり)では、昭和31年10月としている。松本フミが九段上に引っ越したのが昭和32年であるから、昭和31年10月買収が正しいと思われる。

また、参考文献4には、以下のように記述している。

「前略。その1回と2回合わせて、卒業生というのは実は35名なのです。したがって、電機学校同窓会の最初の会員数は35名です。どこで発会式をやったかという、神田錦町の松本亭でやったと書いてある。神田錦町の松本亭と言っただけでは、おそらく皆さん、どこだということになるでしょうが、今ありますこの前の6号館です。」

大正 15 年夏 全国石工組合の会長選挙が、「松本亭」で行われ、300人集まった  
この選挙結果について「松本亭」で石工同士の喧嘩大乱闘。武装警官が鎮圧に当た

る

当時のフミの家族は、長女 寿江(日本髪と着物が似合う)、次女 千鶴子(洋装の方がふさわしい)。

昭和2年4月 「丸通」事件(全国にある運送屋を一駅について一軒)。全国の運送屋の代表が「松本亭」に集結し、鉄道省に襲撃、暴徒化した運送屋が職員に暴行。

錦町署長がフミに懇願

昭和2年秋 五十稲荷の縁日の晩、「松本亭」の女中が植木屋に絡まれる

その植木屋は「松本亭」の玄関口で商売していた

(注)「五十稲荷」とは、「さらば神田キャンパス」の写真を参照

昭和3年以降 「松本亭」は、志士や、浪人や、思想家や、労働運動家の集まりの場所から、石工組合、運送屋の組合、書籍組合の会場場所になった

昭和18年12月11日 加賀まりこ(本名:雅子)は、加賀四郎、寿江の3人兄弟の末っ子として、神田小川町に出生。なお、参考文献2には、母親の名前は出てこないが、母親について、「母に私はほとんど似ていない。外見もゆかしい印象を与える和風美人だった・・・」と述べているので、松本フミの長女 寿江とみて差し支えないであろう。

また、「加賀まりこは、姉と13歳、兄と11歳年が離れている。」とも述べている。

昭和20年2月25日 雑祭りの飾りつけを終えたばかりの「松本亭」は、B29の空襲により、灰燼に帰した

松本フミは、長男秀治夫妻およびその子供たちと共に、埼玉県北浦和の秀治夫人の実家の疎開先に避難

昭和22年 松本フミ(66歳)は、再び神田松本亭の焼け跡に戻って、仮建築を建てたが、松本亭の再建はあきらめた。

昭和26年 加賀まりこは、神楽坂に転居。ランドセルに定期券をぶら下げて、小川町小学校、まで電車通学

また、「父も母も、子供に対してうるさいことをいう人ではなかった」と述べている。

父について、「いつもお洒落で颯爽としていた。そのダンディぶりがどれほどかと言うと、日本に初めて入ってきたバーバリーのトレンチコートを買うために1か月分の給料をはたいてしまうような人」と述べている。

だから、「母は、青山にある父の実家と神田の大地主だった自分の生家に、毎月のように頭を下げて生活費をもらいに行った時代もあったそうなの。」ともらしている。

(注)「神田の大地主だった自分の生家」とは、松本フミのことであることも間違いない。

昭和31年10月 東京電機大学は大学院の設立のために、神田錦町1丁目14番地の松本亭の敷地(204㎡)を買収(参考文献5)

昭和32年5月 松本フミは、住み慣れた神田錦町1丁目14番地の自宅から九段上の新邸に移る

昭和45年6月1日 松本フミ90歳の卒寿の祝いをした

昭和45年7月27日 全生涯を閉じた(松本フミ永眠)

祖母(松本フミ)について、加賀まりこは、参考文献2で「神田錦町で、<松本亭>とい

う料亭を営んでいた祖母は、自由民権運動と社会正義のために一肌脱いだ女丈夫だった。眉目秀麗の近衛兵を見初めて入り婿として迎えたものの、その男性と3児をもうけて明治の末にさっさと離婚している。封建的なあの時代に自分の手で人生を切り拓いていった女性だったのだ。家には、足尾銅山鉍毒事件で闘った田中正造、幸徳秋水、犬養毅父子など、時の政局を動かす政治家や多くの志士たちが出入りし、彼らのパトロンでもあった祖母。私はそこまで豪気じゃないが、やっぱり、“仕切り屋”の血が騒ぐし、“人の突っかい棒”になりたい困った性分だ。」と述べている

ここで、「眉目秀麗の近衛兵を見初めて入り婿として迎えたものの、その男性と3児をもうけて明治の末にさっさと離婚」の記述は、参考文献1と異なる

昭和 51 年頃

父加賀四郎が死去

平成 10 年頃

母加賀寿江(90 歳)死去

母について、加賀まりこは「10 歳で両親が離婚した母は、育児は乳母任せで家業の料亭経営と清治にのめり込む母親の元で育ち、幼い頃から、“孤独”を当たり前のこととして引き受けてきたのじゃないだろうか」と述べている

- 1) 参考文献1:「神田錦町松本亭」川合貞吉著, 学芸書林, 1977 年
- 2) 参考文献2:「とんがって本気」加賀まりこ, 新潮社, 2004 年
- 3) 参考文献3:「工学情報」(昭和 57 年 9 月号)ページ5「神田界わい歴史散歩」(工学部人文社会系教授 藤田豊)
- 4) 参考文献4:「工学情報」(昭和 59 年 12 月号, 校友会創立 75 周年記念特集号)ページ 10(「祝辞」(学) 東京電機大学理事長 蓮見孝雄)
- 5) 参考文献5:「工学情報」(昭和 59 年 12 月号, 校友会創立 75 周年記念特集号)ページ 140「校舎のうつりかわり」